

そだちのねっこ

～乳幼児期の遊びより～



【先生、一緒やな、みててや!」「みてみて、ぼくの電車、わたしの爪!～『やってみよう!』が学びの芽～】

11月20日、3歳児の子どもたちが遊ぶ様子を見学してきました。

子どもたちは自分のしたい遊びを見つけ、保育室や廊下など、好きな場所で遊んでいました。



「氷になあれ～!」とステッキを振りながら、友だちや参観者の反応を楽しんでいる子どもがいました。保育室に戻ると、「先生もしよや!」と誘うと、「オッケー!」と言い、子どもと同じ衣装を着て、なりきる保育者と遊びを楽しむ姿が見られました。

廊下のジャンプ台では、傍にいる保育者の合図や視線を待ち、「いくで!」と自分なりの跳び方を楽しんでいました。また、着地した時の声かけを待っている子どもの姿が印象的でした。「先生、次はなんて言ってくれる?」「どうだった?」と保育者に視線を送り、求めている言葉をもらえると喜びを噛みしめる表情がとてもかわいかったです。そうした嬉しい経験から、友だちの跳び方に

も関心を持ち「次はあんな風にしよ!」とか「もう一回するから見ててな」など、繰り返し楽しむ姿も見られました。

乳児から幼児クラスになり半年が過ぎ、一緒に遊びを楽しんでくれる担任や学年の保育者が大好きになり、『安心基地』となっていることがわかりました。時々、外の世界へ(担任や学年の保育者から離れて)遊びに行くけど、自分が求めている時、自分が困っている時に傍にいてくれる、助けてくれる大人がいるという安心感をもっているからこそ、子どもたちが生き生きと遊んでいると思いました。



また、別の保育室ではA児、B児、C児は、電車の玩具と線路を組み合わせて、遊んでいました。その様子を見た保育者が、「自分たちの電車もつくってみよう?」と声をかけました。すると、「えっ?自分の電車?」と嬉しそうな表情に変わった瞬間を見ました。用意してもらった段ボールにパスでグルグルと色を塗ったり、タイヤを描いたりしていました。「これは何?」と聞くと、A児:「これは近鉄電車やで!」B児:「僕もやで!」C児:「僕ははやぶさやで!」と自分の電車をつくれることに

ワクワクしていて、すぐに教えてくれました。さらにA児は「ここは連結するところやねん」と電車から出た線を指さして教えてくれました。3人とも、やらされている姿ではなく、自分のしたい遊びができている姿であると思いました。

廊下に設置されたステージでは、爪や衣装を身につけ、音楽に合わせて「にゃ～!」と声を出したり、怖い顔をしたりして猫娘になりきって遊んでいました。曲が終わると、化粧台に戻り、爪の手入れをしたり、化粧をしたりしていました。自分でやろうとする中で、ちょっと難しいときは、「先生、手伝って!」と伝えていました。「どこ?ここに貼りたいの?」と子どもの気持ちに寄り添い、すべてをやってあげるのではなく、少し手伝い、子どもが自分でできるような援助をされていました。近くでその様子を見ていた私に、「みて!できたで!」と、爪に紙を付けられたことに満足した様子でした。



形や出来栄が整ってなくても、子どもたちがイメージをもって遊ぶ姿や子どもの声をたくさんききとりながら、「何を楽しんでいるのか」「何を求めているか」を探ることがとても大事になります。

3歳児は、自分でしてみたい思いはあるものの、子どもたちだけではできない部分も多くあります。安全に考慮し、発達段

階に応じた素材や用具を事前に準備をしたり、全部をしてしまうのではなく、難しそうにしているところだけを手伝ったりするなどして、『自分でできた!』につながる保育者の援助がとても大事になる時期です。この経験が、新しいことへの『やってみたい!』意欲となります。さらに、一人ひとりの満足度が満たされて生き生き遊ぶ姿には、『おもしろそう!』な雰囲気が漂い、周りの子どもの興味・関心を誘発し、『やってみたい!』が広がっていく効果があります。これこそが、集団の力だと思っています。

幼児教育は、教科書や指導書がなく、答えが一つではない難しさもありますが、面白さや援助が多様にあります。そこには、どんな子どもに育てたいかというめざす姿を保育者間で共有することが大事になります。子どもに『できる・できない』を求めるのではなく、まずは自らやってみようとする気持ちを育てることが、小学校以降の学びにつながるそだちのねっこであると考えています。